丸山眞男文庫だより　第七回

丸山先生と音楽

一九六七年文理学部史学科卒業　丸山家秘書　牛田尚子

ご逝去の四か月前、先生自らご発案、選曲になるレコード鑑賞会が私共八八年の会（「幼児グループ」母親を中心とする丸山先生の本を読む会）のためご自宅で開かれた。そこで語られたのであるが、クラシック音楽への関心は晩生（おくて）で、大学を終える頃からのこと。ピアノは歳三（よわい）十近く東大助手になってから、最初は紙に鍵盤を描いて練習した。ピアノを親友から譲り受け、先生につきソナチネまで習った頃応召。戦後再開し、やがてご子息達に手ほどきするようになったが、たちまち追い越され、親の威厳丸潰れで止めてしまわれたそうである。

夫人によれば「丸山は〝弾き語り〟が好きで『冬の旅』の最後の「辻音楽師」はよく弾きながら歌って聞かせてくれました」とのこと。

丸山家のレコード、CD、テープ類のリストアップも始まっている。六〇年代からのFM放送の詳細がオープンリールやカセットテープに最後の年まで克明に筆記され、八〇年代からのビデオテープ（ベータ方式）も然（しか）りである。七〇年代を中心に、速記技術を持つ夫人の手により、オペラアワーなど、放送でのアナウンサーによる筋書きがきちんとファイルされていて、ご夫婦共同作業の様子が窺（うかが）える。

ご自分はけっしてレコード狂やオーディオ狂ではないと語られ、最後までオペラやピアノの演奏会にはよく足を運ばれた。交響曲の演奏会には九〇年以降は一回、私もご一緒した武蔵野でのチェリビダッケ指揮・ミュンヘンフィルのブルックナーの七番だけのように思われる。会場立ち去り難く「ブラボー」と恥ずかしそうに小声で叫ばれたのが印象に残っている。

ピアノへは生涯憧憬の念を抱かれていたようで、最晩年のTVテキスト「ピアノでモーツァルトを弾こう」にも入念な書き込みが残されている。

逝去の一か月前になされた大塚久雄氏への追悼文には『冬の旅』の「道しるべ」からの一節が述べられている。同じ頃、お好きなベートーヴェンの言葉をドイツ語で書かれたこともあった。

音楽が血と肉となった大知識人を「幼児グループ」のお蔭で知り得たこと、そして新生五十一号館へのつながりを天のはからいと感謝している。

〔『東京女子大学学報』五六四号、二〇〇一年一一月号所収〕

丸山御夫妻